

近代英語協会第 42 回大会

—— シンポジウム・研究発表・講演 ——

共催：名古屋大学大学院人文学研究科

開催日：2025 年 6 月 28 日（土）

会場：名古屋大学 東山キャンパス
文学部本館 1 階 127 講義室

近代英語協会事務局分室

〒154-8513 東京都世田谷区下馬 3-34-1

日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科
秋葉倫史 研究室内

メールアドレス：akiha.tomofumi@nihon-u.ac.jp

協会ホームページ <http://www.modernenglish.jp>

(Tel. 03-6453-1714 会費振込口座 00810-9-5821)

「EEBO TCP から見えてくる構文の変化と変異」

司会：久米祐介	(名城大学教授)
講師：尾野理音	(名古屋大学大学院生)
講師：森敏郎	(名城大学助教)
講師：玉田貴裕	(皇學館大学准教授)
講師：久米祐介	(名城大学教授)

シンポジウム趣意

名城大学教授 久米祐介

これまで英語の通時的統語論では 2000 年代初頭から登場してきた、いわゆるヘルシンキ系のタグ付きコーパス(The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, 2nd edition (PPCME2), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME), The Penn Parsed Corpus of Modern British English, 2nd edition (PPCMBE2))が用いられてきた。これらの電子コーパスの最大の特徴は、各語に品詞タグと統語タグが付けられており、機能範疇や空の要素も含めた構文解析がなされていることである。このため、タグでの検索も可能であり、複雑な検索式を組むことができ、通時的統語論研究の発展に多大な貢献をしてきた。しかしながら、それぞれのコーパスサイズは比較的小規模 (YCOE : 約 150 万語, PPCME2 : 約 120 万語, PPCEME : 約 170 万語, PPCMBE2 : 約 280 万語) であり、本来検出が期待される事例が検出されなかったり、頻度がある時代に偏ってしまったりするなどの問題が生じてきた。

その一方で 2015 年から Early English Books Online Text Creation Partnership (EEBO TCP)が一般公開され、初期近代英語における大規模な調査が可能となった。現在 EEBO TCP には、1473 年から 1700 年までに出版された英語の印刷物およそ 3 万 5 千点、early print 版で約 16 億語が収録されている。これにより、近代英語においてははるかに大規模な調査が可能となった。しかし、EEBO TCP ではすべての語に品詞(POS)、レマ、標準スペリングは付されているが、統語分析はされていない。このため、各用例の分析にはヘルシンキ系コーパスよりも知識と労力が必要となる。

本シンポジウムでは、これまでのヘルシンキ系コーパスから得られた事例の分析に加え、EEBO TCP から得られた事例を分析することによって、両コーパスの利点を最大限に活用し、英語の通時的統語論研究に新たな可能性を見出すことを目的としている。

「NPN 表現の通時的変化について」

名古屋大学大学院生 尾野理音

本発表では、day by day のように、同一名詞句が前置詞の前後に現れる Noun-Preposition-Noun 表現(以下、NPN 表現)の歴史的発達について考察する。特に、Noun-by-Noun 表現(以下、N-by-N 表現)に注目し、その通時的変化を歴史コーパスに基づいて調査する。現代英語における N-by-N 表現は、副詞句として用いられることが指摘されており、Penn Parsed Corpora of Historical English(以下、PPC)に基づく調査から、初期英語においても同様の振る舞いが観察されることを示す。また、PPC からは得られなかった観察として、Early English Books Online に基づく調査から、近代英語期には名詞句としての用法が存在したことを示す。そして、これらの観察と、初期英語における NPN 表現に関する先行研究の観察を比較し、それにより明らかとなる NPN 表現の歴史的発達に対して、意味的・統語的な観点から説明を与えるを試みる。

「助動詞 must の非人称構文とその歴史的発達について」

名城大学助教 森敏郎

初期英語において、義務や必要性を表す動詞は非人称用法で現れることが知られている。現代英語における助動詞 must もまた当該の用例が観察されており、OED 第2版(s.v. *must*, v.¹, 10)によれば、後期中英語期のみ分布している。また、Gregersen (2020)は史的コーパス PPCME2 を用いて中英語における must の非人称構文を収集し、後期中英語期の例を4件指摘している。しかし、当該構文の歴史的発達を議論する目的にとって以上の事実観察は量的に十分であるとはいえない。本発表では、後期中英語期から初期近代英語期における英語を大規模に収録した史的コーパス *Early English Books Online* (EEBO)から得られたデータに基づき、must の非人称構文の歴史的発達を示す。得られたデータによれば、非人称の must は15世紀までに衰退したと結論づけられるが、この衰退について must の助動詞化の観点から議論する。

「近代英語期における非選択目的語結果構文の歴史的発達」

皇學館大学准教授 玉田貴裕

Visser (1963) や Broccias (2008) によると、英語の結果構文 (例: He wiped the table clean) は古英語では極めて稀であり、中英語以降、徐々にそのバリエーションが増加していった。特に、動詞が本来単独で選択しない目的語が現れる非選択目的語結果構文 (例: She laughed herself silly) は、中英語後期までほとんど見られず、生産的になるのは初期近代英語以降である。しかし、Visser の研究は大規模コーパスが登場する以前のものであり、Broccias の研究も PPCME2 を用いているが、同コーパスの規模は約 120 万語と現在の基準では小規模である。また、初期近代英語における非選択目的語結果構文のコーパス調査はこれまで行われていない。本発表では、こうした先行研究の限界を踏まえつつ、より大規模な調査に基づく分析を行うことを目的とする。具体的には、後期中英語から初期近代英語にかけての言語変化を捉えるため、Early English Books Online (EEBO) のコーパスを活用し、非選択目的語結果構文の発達過程を探る。さらに、得られたデータに基づき、生成文法の観点から当該構文の発達を説明可能な統語分析を提案する。

「中間構文の通時的発達と変異—ヘルシンキコーパスと EEBO TCP から得られた事例の分析に基づいて」

名城大学教授 久米祐介

これまでの一連の研究で能格構文から中間構文への変化を議論してきた。この変化は、事象から属性描写への構文の意味の変化と、潜在的動作主の含意の出現に集約される。本発表では、break, cut, read を中心にヘルシンキコーパスと EEBO TCP から主題項が主語として現れる事例を分析し、上記の2つの変化がどの時期に起きたのかを特定する。具体的には、break は状態変化を表し、その動作主は必ずしも含意されないことから、どちらの構文にも現れることができるため、このタイプの動詞が能格構文から中間構文への変化の起点となったと考えられる。cut は状態変化を表し、その動作主は常に含意されることから、cut が主題項を主語にとるようになった時期を特定することで、潜在的動作主の含意の出現時期を特定することができる。read は状態変化を表さないため能格用法をとらないことから、read が主題項を主語にとるようになった時期を特定できれば、事象から属性描写への意味の変化の時期を特定することができる。これまでヘルシンキコーパスや OED などから収集できた事例のみで分析を行ってきたが、近年 EEBO TCP が利用可能になったことで、収集できる事例が劇的に増加した。本発表では、ヘルシンキコーパスから得られた事例と EEBO TCP から得られた事例を比較しながら、これまでの分析では得られなかった知見を示したい。

1. 「18 世紀初期における関係代名詞使用を巡っての考察—Daniel Defoe の作品群を中心として」

京都大学大学院生 島田悠太

本発表は 18 世紀前半期に活躍した Daniel Defoe の作品群における関係代名詞の使用の実態を明らかにすることを目的とする。現代英語における関係詞の語法の萌芽期にあたる時期が 18 世紀であったということは、例えば Beal (2004: 75) にて指摘がされている通りである。同時に、関係代名詞の使用を巡っては、例えば、*The Spectator* 誌上に掲載された ‘The Humble Petition of Who and Which’ (1712) から分かるように、同時代人が注目した文法現象の一つでもあった。Defoe が当時の英語に多少の関心を寄せていたことは、*An Essay upon Projects* (1697) の「アカデミー案」中からも明らかである。本発表においては、①Defoe の関係代名詞使用に関して、特にその選択と統語面の問題に焦点を当て、②*The Spectator* 誌上に掲載された関係詞を巡っての嘆願内容が当時の実情をどの程度反映していたかを考察する。加えて、③同時代の他作家（特に Jonathan Swift）との比較検討を行うことによって、18 世紀後半期において登場する規範文法書への影響も併せて考察することを目指す。

参考文献

Beal, Joan C. 2004. *English in Modern Times*. London: Hodder Education.

2. 「自由付加詞と休止、音調との関係」

愛知学院大学大学院生 西川明美

被修飾語 (Head Word) との間に休止 (pause) があつたり、他の語が介在したりする場合には、その付加詞がどの語を修飾するかが曖昧になり、事実その付加詞は名詞(普通文の主語又は目的語)と述語動詞相方に関わると考えられてきた。Hendrik De Smet (2013: 103cont.) は、“integrated participle clauses, IPCs”を「付加詞 (adjuncts) は副詞に近いが、母型句の命題中身の一部であり、それらは、イントネーションの休止によって切り離されることはなく、義務的にコントロールされ、母型句の中の否定か極性かの質問に焦点となる可能性がある」と説く。IPCs は、イントネーション境界または書面ではコンマによってマトリックス節から分離されないが、イントネーション・ブレイクを追加すると、Prehead となり、最初の完全強勢のある Head となり得ないため、音声的なコントロールが必要となる。De Smet や Kortmann 他、文法学者による自由付加詞の定義、休止や音調に就いて考察を行う。

参考文献

- De Smet, H. (2013). *Spreading Patterns, Diffusional Change in the English System of Complementation*. Oxford: Oxford University Press.
- _____. (2015). Participle clauses between adverbial and complement. *WORD*. 1 (61), London: Routledge and Dove Medical Press. 39-74.
- Kortmann, B. (1991). *Free adjuncts and absolutes in English: problems of control and interpretation*. London: Routledge.

1. 「使役動詞の受動文に関する通時的考察」

名古屋大学大学院生 外翔太

本発表では、使役動詞 *make* と *let* の受動文における非定形補部節の通時的発達に統語的分析を与える。現代英語では、受動文において、*make* は *to* 不定詞補文、*let* は特定の動詞に限り原形不定詞補文を取る。先行研究である山村 (2015)によると、中英語から近代英語にかけて、*make* の受動文には *to* 不定詞補文だけでなく原形不定詞補文も現れた。本発表では、歴史コーパス EEBO を使用し、中英語から初期近代英語にかけて、*make* と *let* の受動文における非定形補部節の種類とその用例数の変化を調査する。結果として、どちらの動詞でも *to* 不定詞補文と原形不定詞補文の用例が確認されたが、歴史的推移に違いがあることが分かった。具体的には、*make* の受動文では 1600 年代に *to* 不定詞補文の頻度が急激に上昇した一方、*let* の受動文ではその用例数が減少した。原形不定詞補文については、両動詞とも現代英語までに固定表現(*make believe*, *let go* 等)へと収束したが、その過程は *let* の方が約 200 年早かったことが明らかとなった。これらの結果について、使役動詞の ECM 動詞から *wager* 類動詞への変化という観点から説明を試みる。

Iyeiri, Yoko (2018) “Causative *Make* and Its Infinitival Complements in Early Modern English,” *Explorations in English Historical Syntax*, ed. by Hubert Cuyckens, Hendrik De Smet, Liesbet Heyvaert and Charlotte Maekelberghe, 139-157, John Benjamins, Amsterdam.

Postal, Paul (1993) “Some Defective Paradigms,” *Linguistic Inquiry* 24, 347-364.

Sheehan, Michelle and Sonia Cyrino (2022) “Restrictions on Long Passives in English and Brazilian Portuguese: A Phase-Based Account,” *Linguistic Inquiry* 55, 1-35.

山村崇斗 (2015) 「英語史における使役 *make* の補部構造の変遷について」, 『筑波大学論叢 現代語・現代文化』15, 1-13.

2. 「語用論的強化による初期近代英語の進行形の意味変化:「永続性」から「一時性」へ」

日本大学講師 田中智己

初期近代英語期以前の進行形は、単純形と意味の区別がなく、「一時性」よりも「永続性」を表していた。本発表では、進行形が初期近代英語期に語用論的強化という現象によって、中心的な意味が「永続性」から「一時性」へと変化したことを提案する。「語用論的強化」とは、辻編 (2013: 125) などが「ある状況での語用論的な解釈が、歴史的な経過を経て、その表現の意味に組み込まれていくこと」と定義する現象である。ただし、Hopper and Traugott(2003)で述べられているように、*since* などが推論によって新しい意味を獲得した場合は異なり、推論では「永続性」から「一時性」という正反対の意味を獲得したとは考えにくい。そこで、本発表では、上記の進行形の意味変化が、文法化に起因する言語環境の変化と、そこから生じる含意の定着によるものであると仮定する。この仮説に基づき、「一時性」の確立に関わる「歴史的な経過」と「語用論的な解釈」を明らかにするため、Early English Books Online V3 や欽定訳聖書を言語資料とし、共起する現在分詞の特徴や、生起する節の種類を調査した。その結果、17 世紀後半に共起する現在分詞の特徴が動的なものへと変化していること、また、初期近代英語期を通じて、時を表す節内での使用が一貫して顕著であることが明らかになった。これらの結果から、文法化と語用論的強化によって「一時性」の意味が顕在化しやすくなり、使用頻度の上昇に伴い、その意味が定着したことを示す。

参考文献

Hopper, Paul J・Elizabeth Closs, Traugott (2003²) *Grammaticalization*. Cambridge University Press, Cambridge.

辻幸夫 (編) (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』 研究社 東京.

「When syntax and meaning are ‘under construction’: An empirical view of fragments in the recent diachrony of English」



Full Professor, Javier Pérez-Guerra, University of Vigo (Spain)

<https://lvtc.uvigo.es/people/jperez>

Syntactic analyses of speech and writing are commonly grounded in the belief that the clause is the basic segment, typically construed as a unit consisting of a verbal component (either the verb itself or other abstract ‘verb-like’ features) that selects or is accompanied by a number of external and internal arguments and adjuncts. This talk challenges that assumption, proposing instead that the verb-centric clause is only one of the possible linguistic constructions resulting from the projection or augmentation of words, phrases and other elements in language. Specifically, this presentation focuses on FRAGMENTS, that is, constructions that, despite lacking a fully-fledged clausal or sentential structure, fulfill communicative functions similar to those of orthodox clauses or sentences in speech. A definition of fragment will be provided within the framework of (Cognitive) Construction Grammar, laying the groundwork for taxonomies of fragments in English, supported by spoken and written data retrieved from corpora.

The linguistic features that define fragments will be illustrated through the analysis of two fragmentary constructions in English: *why*-fragments (WFs), such as *Why* (deal with) fragments?, and Mad Magazine sentences (MMs), such as (*Me*) deal with fragments today? While both types can be equivalent in meaning to their corresponding fully-fledged interrogative sentences, they may also convey a specific nuance of scepticism regarding a given proposition. To examine both this enriched interpretation beyond the canonical reading of equivalence to complete questions, and the potential constructionalisation of WFs and MMs in contemporary English, two corpus-based studies will be conducted using data from the BNC1994 DS, Spoken BNC2014 and COCA. Theoretically, WFs and MMs will be classified, first, as ‘constructions’ from a Construction Grammar perspective and, second, as members of the so-called ‘Sceptical Small’ construction. The prototypical defining features of this umbrella construction include interrogative intonation and ‘small’ or untensed status in terms of form, as well as a non-compositional sceptical interpretation in terms of meaning. This constructionalist approach will offer several advantages. First, it effectively accounts for the enriched interpretation of WFs and MMs by situating these constructions within a broader category that likely encompasses other small or untensed nonsententials conveying an irrealis sceptical nuance. Second, it explains the formal (intonational, structural and syntactic) similarities between WFs and MMs. Third, it challenges ellipsis/deletion-based explanations of WFs and MMs, supporting instead a nonsentential (or ‘base-generated’) design of these constructions.

The data reveal a modest increase in the frequency of WF constructions, a significant rise in instances conveying the sceptical interpretation over time, and a preference for discourse-new remnant categories, indicating ongoing constructionalisation in contemporary British English. The second case study will examine variation in MMs between the periods 1990-2004 and 2005-2019, based on data from COCA. The evolution of sceptical MMs in terms of formal and meaning-related features will lead to the conclusion that MMs do not exhibit statistically significant differences in linguistic design, textual distribution, polarity or referential status of constituents over time. These findings will confirm that the MM construction has already undergone constructionalisation in contemporary American English.

In conclusion, the talk will suggest that statistical methods can be employed to evaluate and compare construction types, linguistic variation and processes of constructionalisation.

(本特別講演は、日本学術振興会外国人招へい研究者（短期）事業の一環です。)

本部

文学部本館 平面図

書店展示

大会会場

休憩室

1 階

受付

